Vol. 115, No. 4 May 2018

題字　一萬田 尚登 第５代日印協会会長

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人　日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 115 年）

ダージリンにある
マカイバリ茶園の
収穫前の風景と、
世界遺産の
トイ・トレイン

写真左 提供：笹田勝義
日印協会常務理事

目次

1. 2018 年インド出張「ダージリンを行く」 P. 3
2. シルクがつなぐ日本とインドの物語 P. 7
3. インドニュース（2018 年 4 月） P. 11
4. イベント紹介 P. 14
5. 新刊書紹介 P. 17
6. 掲示板 P. 19

1. 2018 年インド出張「ダージリンを行く」

A Travelogue of Darjeeling

日印協会 常務理事　笹田　勝義

インドに、こんなにも新鮮で緑深く、自然の霧に包まれた地（デリーのような公害の霧ではない）があったのだろうか…しかもこんなにも涼しいインドが！

「高原の宝石」と称された大自然に抱かれた地は、筆者にとって初めての土地となる。かつてインドへ攻入った征服者や冒険家、芸術家、詩人、文学者など多くの偉人たちは、この神話のように壮大でたぐいまれな美しい風景と、素朴で純真な住民たちに心奪われた。そして、ダージリンは筆者にも、心を癒してくれる強烈な印象を与えてくれた。

2018 年 4 月 5 日から 10 日間、日印協会からインドへ出張した。いつものように、デリーやコルカタにて大使館や総領事館、インド在住の方々、インド事業家にお目に掛かり、最新のインド事情や貴重なお話をお聞かせいただいたが、ダージリンを訪れた印象が余りにも鮮烈であったため、今回はダージリンに限って現地報告をしたい。

ダージリンはインド東部に位置し、コルカタを州都とする西ベンガル州に属する、言わずと知れた「世界のダージリン・ティー」の生産地である。コルカタもインド有数の酷暑地であるが、ダージリンは、別天地だ。英国人を始めとして、多くの外国人が避暑地に選んだ理由が納得できる。訪問した時は、デリーやコルカタでは、40℃を超えているにも係らず、当地は 20℃前後の涼しさで、ホテルには暖房器具が備わっている。標高 2100m、涼しい筈である。世界第三位の高峰カンチェンジュンガ（8586m）の頂きを一望でき、すぐそこに最高峰のエベレスト（8848m）が鎮座する。19 世紀の初めに、英国人がこの地を発見して以来、圧倒的な景観と澄んだ空気に、避暑地として人気の場所となった。しかし、急峻な斜面に張り付くように生活することは、厳しいものであったと想像する。平面スペースが取れないため、自ずと上へ上へとスペース確保するしかないが、道路が狭く重機類搬入が出来ないため、もちろん高層ビルはない（エスカレータやエレベータすらないと思われる）。歴史的背景から、当地にはチベット系とネパール系のインド人が大多数で、しかも仏教徒が多いと聞く。このことが、当地の人々が他の多数のインド人と、文化・気質を異にしている所以かもしれない。

＜ダージリン入口部にある茶園、茶摘み風景、ダージリンの一部を見通す風景＞

夏季シーズン真っ盛りの 40℃近くあるコルカタから、バグドクラ空港経由にて出迎えの車に乗り込み、目的地まで約 3 時間の移動である。最初の小一時間は暑さを感じながら車窓を楽しんでいたが、突然、急峻な斜面を登りだした。栃木県にある、日光のいろは坂（勿論、道路整備は比較にならないが）を登っていくような感じで、しかも雨が降りだし運転し辛そうだったが、スピードを緩めず、狭い通りでの車のすれ違いに、ひやひやしながら 2 時間のドライブ。道中、狭い崖っぷちに身を寄せるように立ち並ぶ家々、松のような強大な木と太い竹林（インドの工事現場で竹の足場をよく見るが、産地はこの辺にあるらしい）や、緑濃い茶園を見ながら宿泊するホテ

ルに到達した。投宿した Elgin Hotel は決して 5 スターホテルではないが、伝統のある落着いた雰囲気のあるホテルであった。ネルーやインディラ・ガンジー元首相、エリザベス女王なども泊ったことのある 200 年以上の歴史を誇る典型的な英国風ホテルで、英国人好みの作りになっている。

<Elgin Hotel のロビー>

このホテルでは朝食と夕食が付いていて、味はインド風ではあるが、格式高い雰囲気の中食事が楽しめる。市中には多くのホテルが点在しているが、大半はインド人観光客を対象としていて、お勧めできないが、Elgin Hotel は日本人にも楽しめるホテルだろう。ホテル内のエンターテイメントは全くないが、本格的なアフタヌーンティーを写真のロビーで頂ける。投宿したホテルのすぐ近くにダージリンの繁華街がある。ここはチョーラスタと呼ばれ、尾根の頂上に位置しており、地元民や観光客で非常に賑わっている。必需品は全て揃い、有名なチベット、ネパール料理も楽しめる。事前に注意しなければならないことは、旅行には地図が不可欠だが、ダージリンの土地柄、山坂が多く、平面的な地図は直感的に理解できないため、余り役立たず、目標の設定には注意が必要だ。また、多少高地のため、急ぐと息切れがする。

今回のダージリン訪問の最大の目的は、高峰カンチェンジュンガのご来光を見ることであった。しかし、普段の心掛けが悪いのか、多くのインド人観光客と早朝に同峰を見ることができるタイガー・ヒルまで行ったが、写真のように、雄大な展望が出来る筈のカンチェンジュンガは、想像するだけに終わった。

<カンチェンジュンガを見る方角を窺うが、霧で見えず>

ダージリンは紅茶の生産地として英国人が開拓したが、気温と共に、霧が深いことが良質の紅茶を生む秘訣だそうで、人々は自然条件が揃っている当地に長く根付き、世界のダージリン･ティーを作り続けている。あのコク深い香りは、日本では経験のできないものだろう。ダージリン中心部に有名な茶園があるが、少し下ったところに、マカイバリ茶園という、世界的に名を馳せた特筆すべきオーガニック茶園がある。筆者がまだ現役で 20 年前にニューデリーに駐在していた頃に知り合った日本の商社マンが、退職後に設立したマカイバリ・ジャパンの会長（石井吉浩　氏）と懇意にしていると申し上げたところ､お嬢さんの石井道子　社長（日印協会　個人会員）も先月来園されたとのことで、大変に歓待をしてもらった。

<マカイバリ茶園の製造責任者ダス氏（左）>

この頃は、丁度ファーストフラッシュの摘み取り時期であったが、ここで頂いた紅茶は最高の味で、その日に摂れた紅茶をお土産に頂いた。

急峻な斜面に作られた茶園や山々の深い森林を見るにつけ、大昔は野生の獰猛な大型動物が闊歩していたであろうと思う。今やそのような光景はないが、下の写真のような動物がいたのだろう。

<ダージリン動物園の（左から）胸に半月を持つヒマラヤヒグマ、ユキヒョウ、ベンガルタイガー>

ダージリンで有名なのは、世界遺産のゲージ幅がわずか610㎜のおもちゃの蒸気機関車、トイ・トレインだが、人の歩くほどのスピードで、ダージリン駅とゲーム駅を1時間半ほどで往復する。ダージリン市中を走り、風景を十分に楽しめる。同乗した観光客は、蒸気機関車に大はしゃぎであった。

＜車両を牽引する蒸気機関車（左）、ダージリン駅にて、トイ・トレインとともに記念撮影（右）＞

ダージリンは今や観光地として名声を得ているが、英国統治時代や中国からの迫害など、歴史的に辛い時代を経ている。チベット難民センターは、その象徴として上げられるだろう。中国チベット自治区から亡命してきたチベット難民の自立を支援する施設である。糸つむぎ、カーペット織り、毛糸の小物などを細々と作って販売している。劣悪な労働条件下で、稼ぎも少ないが、政治的理由で故郷へ帰ることもできない。生活環境は貧しく、何故このような施設に留まるのだろうか。現在の居住者は、昔から迫害を受け逃れてきた人々であろうが、高齢者が多く、言葉の問題（チベット語）の障壁もあって離れることができないと想像する。このような過酷な地に居続ける理由として、「信奉するダライ・ラマが時々帰ってくるので、離れることが出来ない」という言葉が印象的であった。しかし、彼らの子孫は当地を離れ世界に羽ばたいているようだ。

ダージリンの人々は、筆者が過去に接してきたインド人とは異なる印象を受けた。多分に民族的要素、歴史的背景、過酷な生活環境など、一言では言い表せない部分があるにせよ、何とも人懐こく、また、自分の生活に満足しているように感じた。当地でも、世界の情報は溢れんばかりに入ってくるが、彼らは決してそれらに惑わされることがないように思う。インド特有のパパママ商店が多いが、ぼろ儲けをしようとの魂胆がない。決して人を騙さない（これを結論付けるのは、余りにも経験が少ないが）、どの店に行っても、価格に然程差がなく、駆け引きの無い商売をしている。これは、隣国に世界一幸福度の高いブータンがあり、決して高望みをしない今の生活に満足する慣習のせいではないだろうか。勿論、インドにはカースト制度が歴然と残っており、その影響も否定はできない。しかし、顔だちや振舞など、我々日本人に相通じるところが多く、安心感も手伝って、異国に居る雰囲気が少ないように感じた。家々の軒先には、花が多く飾られており、気候が厳しい中でも自然を愛する気持ちが表れていたように思う。道の隅にはまだゴミが散乱していたが、ベランダなどに飾られた花は、心を和ま

せてくれた。滞在したホテルには見事にきれいな花が管理されており、目を楽しませてくれる。これも、厳しい土地に住む生活の知恵であろう。

最後に、インドに関わって長くなるが、もう一度行ってみたいインドの地はどこかと問われたなら、このダージリンの土地を一番に上げるだろう。そして、カンチェンジュンガをこの目で見てみたい！インドはこの数十年間で著しい進歩、発展をしてきたが、大都市だけを見て、「これがインド！」と語ってはいけないと改めて感じ入った。

＜番外編：ムールガンダ・クティー寺院の仏教壁画＞

話しは変わり、以前、日印協会主催のミニ講演会、様々なインドで、サルナートにあるムールガンダ・クティー寺院の壁画を制作した、日本人画家、野生司　香雪（のうす　こうせつ）の実績を溝渕茂樹　氏(日印協会　個人会員)に紹介していただいたが、偶々、同寺院を訪れたので、その壁画を拝見してきた。多くのインド人観光客が訪れ、ブッダの一生を描いた壁いっぱいの壁画を興味深く見ていた。当協会でも、この壁画の存在を少しでも多くの方に知ってもらうため、講演会や『月刊インド』でも画集を紹介するなどの活動をしてきた。今年、同壁画の修復が始まるが、さらに美しくなる、この日印の文化交流を象徴する壁画を、これからも多くの人が目にするのがとても楽しみだ。

＜野生司香雪氏が描いた壁画がある
ムールガンダ・クティー寺院＞

＜吉田博（1876～1950）画、ダージリンの朝＞

2. シルクがつなぐ日本とインドの物語

Strengthening the Relationship between Japan and India through Silk

JICA 青年海外協力隊　荒山　和也
飯田　陽平
市川　素

1. はじめに

飛行機から降り、熱気と喧騒に包まれたインドの地に立って周りを見渡すと、様々な“インド”が瞬く間に飛び込んできます。人、車、オートリクシャー、犬、牛、ゴミ、広告、商店、ビル・・・混沌とした視界の中でひときわ彩をもって目に映るのが、女性たちが身にまとうサリーです。南アジアの強い日差しの下でより一層映える鮮やかな色使いと、歴史と伝統を感じさせる多種多様なデザインが見る人の心を奪います。近代化の進む今日のインドにおいてもなお、サリーは女性たちの衣生活を支えており、中でもシルクで織られたシルクサリーは高級品として女性たちの憧れの的となっています。そのようなインドのシルク製品の裏側には、かつて世界一のシルク大国であった日本の技術とインドの養蚕業の発展に命がけで貢献された日本人専門家、そして現在でも活動を続けている JICA 青年海外協力隊の意志と情熱が隠されています。

＜鮮やかな光沢を放つシルク　写真提供：市川素＞

＜シルクの原料となる真っ白な繭　写真提供：市川素＞

2. JICA 技術協力プロジェクト

養蚕業の近代化とシルク生産量の拡大を図るインド政府は1990年に日本政府へ技術協力支援を要請し、翌1991年から JICA による技術協力プロジェクトがスタートしました。以来 2007 年まで計 3 期 16 年に渡るプロジェクトが実施され、100 名近くもの日本人専門家がインドに渡り、インドの養蚕業の発展に寄与しました。

プロジェクト第一期ではインドに適した蚕種や養蚕技術の開発、第二期では現場実証、第三期では農家への普及、という形で研究から現場まで段階的にアプローチすることで効率的な技術普及が進められました。プロジェクト期間中、現場を重視し、積極的に農家のもとへ足を運ぶ日本人専門家の活動は現地の人々にも受け入れられ、現在でも「JICA のおかげで自分たちの生活を豊かにすることができた」と JICA への感謝の気持ちを持ち続けている人がいます。

JICA の専門家の一人は当時の活動を振り返り「本当に命がけで取り組んだ。失われていく日本の養蚕技術をインドに残そうとみんな必死に取り組んだ。そしてその思いにインドの方が応えてくれたことが本当に嬉しかった」と話しておられました。16 年間の JICA 技術協力を経て、インドの養蚕業は飛躍的に発展し、現在では中国に次ぐ世界 2 位のシルク生産国として、国内外で高い評価を受けるシルクを生産し続けています。

＜日本由来の「条桑育」と呼ばれる飼育方法。より衛生的且つ効率的な飼育が可能。　写真提供：市川素＞

＜日本由来の「回転まぶし」と呼ばれる収穫器具。上質な繭が生産でき、ロスも少ない。　写真提供：市川素＞

3. JICA 青年海外協力隊

2015年からは新たにJICA青年海外協力隊の派遣が開始されました。協力隊員は技術協力プロジェクト時代に配属先（CSB-Central Silk Board 中央蚕糸局）に蓄積されたノウハウをより効率的に農家に広げていくこと、また農家自身の問題解決能力を高め、自主的かつ持続的な発展を促すことを目的とし、南インドと北インドの計4州への派遣が実施されました。2018年3月現在、南インドでは、タミル・ナド州ホスールで荒山隊員、アンドラ・プラデシュ州ヒンドゥプールで市川隊員が活動し、北インドではウッタラカンド州デラドゥンで飯田隊員が活動しています。

＜派遣地域：上からウッタラカンド州デラドゥン、アンドラ・プラデシュ州ヒンドゥプール、タミル・ナド州ホスール＞

「養蚕」ではなく「コミュニティ開発」という職種で派遣されている私たちはインドに来た時点では養蚕経験、知識とも乏しく、中には「彼らに一体何ができるの?」と疑問を持つ人も少なくありませんでした。実際に、協力隊員として過ごす2年間は困難の連続でした。専門知識の不足や言語的障壁に加え、インド政府の縦割り傾向、時間感覚の違い、社会情勢に振り回されることや病気にかかり休養を余儀なくされることもありました。しかし、現地の人々と生活を共にし、足繁く農家のもとに通い、対話を重ねることで徐々に自分たちに何ができるのか、自分たちに何が求められているのかを見つけていくことができました。

私たちの活動は、「農家の養蚕技術や知識を共有することを目的とした農家間のグループ作りを行い、そのグループに対してワークショップやグループ活動を企画・提案し、グループの発展につなげる」というものです。活動開始当初、配属先の同僚たちの中には「グループ作り」という点のみにとらわれてしまい、農家を集めて一方的にグループを作るよう命じるなどした結果、実体のないグループができてしまうこともありました。そこで私たちは「なぜグループを作るのか?」「グループを通して何がしたいのか?」という点から自発的なグループ形成を促し、農家自身による活動へのサポートを行ってきました。

例えば、グループ活動へのモチベーション向上と金融サービスへのアクセスを高める必要があると感じたグループに対しては、マイクロファイナンスによるグループ融資実現に向けて支援しました。さらに、新しい養蚕技術や知識を学びたい、またグループの運営方法や活動事例を知りたいというグループに対してはスタディーツアーを企画し、養蚕の研究機関や近隣のNGOを訪問したりしました。グループ活動を通じて新しいことに挑戦す

ることを学んだグループのメンバーたちは、徐々に自発的にミーティングを行い、次は何に取り組むかを自分たちで決定していくようになりました。

＜筆者が作成したヒンディー語のビジュアルポスター＞

また、私たち協力隊員は、日本で培った自身の知識や経験を活かした活動にも取り組んでいます。学生時代に写真やデザインを専攻していた飯田隊員は、対象農家の識字率が高くないという点に着目し、字の読み書きをする事が出来ない養蚕農家でも適切な養蚕手法を理解し実践できるような仕組みを導入しました。例えば、絵や写真を用いたビジュアルポスターを作成し、適切な養蚕手法の拡散や衛生啓発活動に取り入れました。作成したビジュアルポスターは配属先から高い評価を受け、他州でも配布していくことが決まり、協力隊員によりヒンディー語・カンナダ語・タミル語・テルグ語の 4 言語に翻訳され、活動対象地域の養蚕農家への配布が始まっています。一般企業での勤務経験がある荒山隊員や市川隊員は、人脈形成やネットワークづくりが養蚕農家にとっての新たな気づきや発展につながると考え、大学生と養蚕農家の交流を通した地域のエンパワメントや養蚕農家のモチベーション向上を目的としたプログラムを立案したり、日本企業の製造現場では当たり前となっている 5S 活動を養蚕現場仕様にアレンジしたり、養蚕器具を製造している企業を訪問して農家とのネットワーク作りに取り組んだりしました。

他にも日本の養蚕技術である「条桑育」や、JICA の技術協力プロジェクト時代に先進的な養蚕器具として紹介された「回転まぶし」といった、これまでインド人研究者からはインドの養蚕現場において実践は困難だと敬遠されてきた技術の導入に取り組みました。「外部者」である、JICA 青年海外協力隊だからこそ発想できるアイデアを駆使しながら忍耐強く現場で実践するなど、柔軟性と創造性を持って活動に取り組んでいます。養蚕の範囲に捉われない多種多様で幅広い活動は徐々に配属先や農家から認められるようになり、意見やアイデアを求められる機会も多くなってきました。ボランティアである私たちはインドの人々の仕事や生活を劇的に向上させることはできませんが、現地の人々と共に考え、共に行動することを大切にして養蚕農家の発展・向上のために日々の活動に取り組んでいます。

＜農家グループとの写真　写真提供：荒山和也＞

＜ビジュアルポスターを使った衛生啓発ワークショップ
写真提供：飯田陽平＞

また私たちは、現在では重要なパートナー関係となっている日印の友好関係を草の根レベルでも更に広げていこうと取り組んでいます。インドの農村部にはそもそも日本という国自体を知らない人も多く、外国人に会うことも初めてという人たちが大勢います。そのような人々に対し、時にはインターネットやSNSを用いて交流を図ったり、日本の文化や風景、養蚕の様子を紹介したり、逆に日本に対して情報発信を行ったりと、両国を結ぶ活動も行っています。

4. 最後に

かつて世界一のシルク大国であった日本の養蚕業も、化学繊維や輸入生糸の台頭、工業化による就業人口の減少や高齢化などにより、現在では一部の地域で行われているのみとなってしまいました。一方で、インドのシルク生産量は年々増加傾向にあり、政府も養蚕業への積極的な投資を行っています。そのようなインドシルクの中には、日本の技術とそれに携わった日本人の思いが脈々と受け継がれています。

また、近年では日本国内においても、蚕やシルクの特性に注目し、医療・製薬や化粧品業界などから養蚕やシルクへの関心が高まってきています。拡大と成長を続けるインドの養蚕に着目し、インドの研究機関に日本の研究者が来訪したり、日本企業がインドのマーケット視察のために訪印したりといった動きも出てきており、今また新たな糸が結ばれようとしています。今後もシルクを通じた両国の関係が末永く続いていくことを願っています。

＜繭の収穫風景　写真提供：市川素＞

＜広がる桑畑　写真提供：市川素＞

本稿に使用された写真・図表は筆者またはJICAに著作権が帰属する。本稿におけるあり得べき誤りは筆者のものであり、本稿において述べる意見は個人のものである。また、本稿はJICAの組織としての意見を代表するものではない。

＜参考文献＞

山田浩司『シルク大国インドに継承された日本の養蚕の技』ダイヤモンド社、2012年

3. インドニュース(2018 年 4 月)
News from India

1. 内政

【予算国会後半会期の閉会】

4 月 6 日

- 予算国会後半会期が閉会。時間の有効利用という意味での生産性は、下院が 4%、上院が 8%となり、2000 年以降でワースト 5 となる低い生産性を記録した。

4 月 11 日

- モディ首相は、「国会が人質に取られている」として国会を紛糾させた野党等を批判し、BJP 所属議員に対し、1 日間のハンガー・ストライキを行って国民に訴えかけるよう求めた。
-

【少女強姦罪の厳罰化】

4 月 21 日

- 内閣は、少女強姦罪の厳罰化等のための大統領令を閣議決定した。また、コヴィンド大統領はこれを承認した。

2. 経済

【ジャイシャンカル前外務次官の人事】

4 月 23 日

- タタ・サンズ社は、前インド外務次官のジャイシャンカル氏を、タタ・グループのグローバル事業部社長（President of Global Corporate Affairs）として迎える人事を発表。ジャイシャンカル氏は、タタ・グループのグローバル事業とその国際戦略開発を担う。タタ・サンズ社の国外事務所からの報告を受け、チャンドラセカラン・タタ・サンズ社取締役会長に報告する立場となる。

【農村の送電網接続】

4 月 29 日

- モディ首相は、全国の全ての農村が送電網に接続された（各村内の 10%以上の住宅が送電網に接続された）と発表。2015 年に定めた 1000 日以内実施という期限の 12 日前の達成となる。政府は新たに、2019 年 3 月までに 4000 万軒の一般住宅に電力を普及させるとの目標を定めた。電力省によれば、実際の農村における電気普及率は平均で 82%以上（地域により 47%～100%とまちまち）との由。

3. 外交

【インド・アゼルバイジャン関係】

4 月 4－6 日

- スワラージ外相はアゼルバイジャンを訪問し、アリエフ・アゼルバイジャン大統領を表敬したほか、メメディヤロフ・アゼルバイジャン外務大臣と会談した。また、スワラージ外相は第 18 回非同盟運動（NAM）中期（？）閣僚級会合に出席した。

【インド・ネパール関係】

4 月 6 日－8 日

- モディ首相の招待を受けて、オリ・ネパール首相がインドを公式訪問し、コヴィンド大統領及びナイドゥ副大統領を表敬したほか、モディ首相と会談した。

【インド・スウェーデン関係】
4 月 16 日－17 日

- ロヴェーン・スウェーデン首相からの招待を受けて、モディ首相はスウェーデンを訪問し、カール 16 世グスタフ・スウェーデン国王陛下に謁見したほか、ロヴェーン首相と会談し、合意文書の署名、印スウェーデン共同行動計画が発出された。

【インド・英国関係】
4 月 17 日－20 日

- メイ英首相からの招待を受けて、モディ首相が訪英し、メイ英首相と会談。英印共同声明の発出及び合同文書の署名、テクノロジー、貿易等に関するイニシアチブの発表が行われた。また、モディ首相は、英連邦サミット 2018 に出席した。

【インド・ドイツ関係】
4 月 20 日

- モディ首相はドイツに立ち寄り、メルケル独首相と会談した。

【インド・中国関係】
4 月 21 日－24 日

- スワラージ外相が訪中し、王毅国務委員兼外交部長との間で中印外相会談及び共同記者会見を行ったほか、習近平国家主席及び王岐山国家副主席を表敬した。また、スワラージ外相は、SCO 外相会議に出席したほか、アブディルダエフ・キルギス外務大臣及びカミーロフ・ウズベキスタン外務大臣と会談した。

4 月 27 日－28 日

- モディ首相が中国の武漢を訪問し、習近平国家主席との間で非公式会談を行った。

【インド・モンゴル関係】
4 月 25 日－26 日

- スワラージ外相がモンゴルを訪問し、ツォグトバータル外務大臣と会談したほか、同外務大臣と第 6 回印モンゴル共同協力委員会を共催し、合意議事録が発出された。

4. 日印関係

【インド高速鉄道に関する第 7 回合同委員会】
4 月 2 日

- 東京において、インド高速鉄道に関する第 7 回合同委員会が開催された。この会合には、和泉洋人内閣総理大臣補佐官（日本側の共同議長）を団長として、関係部局（外務省、財務省、経済産業省、国土交通省、JICA 等）の幹部が参加し、インド側からは、ラジブ・クマール行政委員会副委員長（インド側の共同議長）を団長として、鉄道省、財務省、在京インド大使館等の関係各省及びインド高速鉄道公社の幹部が参加した。インド高速鉄道事業の進捗や今後の工程を確認するとともに、メイク・イン・インディア（現地生産）の推進や駅周辺の交通基盤の整備について議論が行われた。

【在京インド大使館主催「花見ランチ」】
4 月 3 日

- 在京インド大使館主催「花見ランチ」（於:千鳥ヶ淵）が開催され、河野太郎外務大臣夫妻が出席した。

【日米印三カ国協議】
4 月 4 日

- インド、日本及び米国は、共通の関心事項である地域及びグローバルな課題について話し合うため、ニューデリーにおいて、第 9 回日米印局長級会合を開催した。 2017 年 9 月 18 日に国連総会に際してニューヨークで開催された日米印外相会談にて示された方針に基づき、今次会合では、連結性、インフラ開発、不拡散・テロへの対抗、海洋安全保障、海洋状況把握及び人道支援・災害救援といった分野における協力を強化するための具体的な道筋について議論が行われた。

【中根外務副大臣の訪印】
4 月 10－11 日

- 中根一幸外務副大臣は、インドを訪問し、第 16 回国際エネルギー・フォーラム（IEF）閣僚級会合に出席した。中根副大臣は、エネルギーアクセスの向上をテーマとする全体セッション 2 にパネリストとして参加し、外務省は再生可能エネルギーの重要性を踏まえた外交を一層積極的に展開し、日本の先進的な技術力とイノベーションの力を活用し世界の未電化地域のエネルギーアクセス拡大に寄与していく旨発言した。

今月の注目点：モディ首相の中国訪問（中印非公式首脳会談）
4 月 27～28 日、モディ印首相は中国の武漢を訪問し、習近平国家主席と計 6 回会談（うち 1 対 1 の会談は 4 回）を行った。両首脳間で非公式での首脳会談開催は初めて。

＜写真：PMIndia＞

中印両国は概ね以下の共通した内容のプレスリリースを発出。

- 平和的で安定しバランスのとれた中印関係は、現在の国際的な不確実性における、安定の前向きな要素となること、「アジアの世紀」のための環境を作り出すことで一致。互恵的かつ持続可能な形で、より緊密な発展のパートナーシップ(Closer Development Partnership)を強化していくことを決定。
- 中印国境問題特別代表（※）による取組に対する支持を表明。公平、合理的かつ相互に受入可能な合意模索のための取組を一層強化させることを要請。国境問題管理における信頼及び相互理解構築、予測可能性及び効率性の促進に向けて連絡を強化するべく、それぞれの軍に対して戦略的なガイダンスを発出。（※）印側はドヴァル国家安全保障担当補佐官、中国側は楊潔チ国務委員による協議枠組。
- 市場間に存在する補完性を活かしつつ、バランスがとれ、持続可能な形で二国間の貿易・投資を推進することで一致。開かれ、多極的かつ多元的で参加型の国際経済秩序を構築する重要性を改めて表明。
- 全ての共有関心事項の更なる協議を通じて戦略的なコミュニケーションの強化の必要性につき一致。
- 感染症、自然災害、気候変動、テロ等、国際的課題の解決促進のため、建設的に貢献することで一致。

4. イベント紹介
Japan-India Events

＝最近のイベント＝

◆ 『インド、独り舞ふVol. 5』が開催されました

＜写真上：カタックのパフォーマンス、下：出演者が一同に会する
©インド独り舞ふPhoto by Macoto Fukuda＞

第5回目となる、「インド、独り舞ふ」が4月16日（月）～18日（水）の3日間に渡り、南青山マンダラにて開催されました。このイベントは毎年、豪華な出演者がソロでパフォーマンスをする、なんとも贅沢なイベントです。

このイベントの醍醐味は、インド舞踊の王道オディッシー、カタック、バラタナティヤムはもちろん、他では見る事の出来ないインド文化も体験できることです。ケーララ州の、世界で最も古い舞踊劇の一つであるクーリヤッタムや、灼熱の大地で生まれたラジャスタンダンス、バングラデシュとインド西ベンガルの農村部に暮らす神秘的な吟遊詩人、バウルの歌など。

イベント主催者の、インドの奥深く多様な文化への愛を感じ取ることができます。妥協を許さない、質の高い出演者のせめぎ合いと、普段見る事の出来ない魅力的なパフォーマンスの数々が、毎回、オーディエンスを満足させています。

Vol. 6もお楽しみに！

◆ 九州で大規模インド・イベント、ナマステ福岡2018が開催されました！

2018年4月21日（土）、22日（日）の二日間、福岡市で「ナマステ福岡2018」が開催されました。今年で第三回目となるこのイベントは、福岡に住むインド人で構成する「福岡インド友好協会(FIFA)」が主催しています。実行委員会およびボランティアスタッフは、福岡および九州近県に住む在日インド人とそれを支援する日本人です。このイベントの特徴は、インド人ボランティアスタッフが非常に多いという点です。福岡を学ぶ場として選択するインドの若者が増えており、今年は昨年を上回る多くのインド人学生らがボランティアとして参加しました。日本語学校の入学式を終えたばかりの学生もいましたが、日本人と触れ合い、日本のおもてなし精神を学ぶことが、彼らにとっても非常に有意義な経験となっています。素人ゆえ手探りのことも多く、準備は大変なのですが、日印スタッフのチームワークが非常によく、無事に二日間を終えることができました。

今年もオープニングセレモニーでは、T.アームストロング・チャンサン在大阪・神戸インド総領事をはじめとするご来賓の皆様にご祝辞を頂きました。また初の試みとして、インド人スタッフ達がそれぞれの出身地の衣装

を身に着けモデルとなり、ファッションショーを行いました。登場に合わせて各地の文化や衣装の説明を司会者が行い、お客様にもインド文化の一端を知って頂けたのではと思っております。最後は恒例になったボリウッドダンス、ステージ前にお客様とスタッフが集まり、全員が素晴らしい笑顔でダンスを楽しみました。私達のイベントには、手作りならではのアットホームな雰囲気があります。この特色を大切にしながら、今後も「九州におけるインド文化」を盛り上げていきたいと考えております。

[OfficialFacebook]　https://www.facebook.com/namasteteam/

（本文・写真提供：福岡インド友好協会会長・ナマステ福岡実行委員会会長 クマル・ダルメンドラ）

◆　ナマステ・インディア in 女川町が開催されました

＜ナマステ女川のステージパフォーマンスの様子＞

ナマステ・インディア in 女川町（ナマステ女川）は、ゴールンウィークの5月3日（木）・4日（金）に、宮城県女川町の女川町まちなか交流館にて開催された。今年で3回目となる宮城女川町でのインドの祭典。開催のきっかけは、7年前の東日本大震災に遡る。震災直後、インド共和国政府は友好国日本の危機的状況に、インド国家災害対応部隊NDRF46名を派遣した。インドにとって初めてのNDRF国外派遣であり、その行き先が女川町だったのだ。牡鹿半島の付け根に位置する女川町は、古くから漁業で栄えた町で、女川湾からすり鉢状の山に囲まれた、典型的なリアス式海岸の町である。しかし、震災ではそれが災いし、女川湾から迫り上がった津波の高さは海抜20～30mに達し、死者・行方不明者は、町の人口の約1割、およそ1千人が津波災害の犠牲となった。

あれから7年。町の復興のあゆみとともに、ナマステ女川も、徐々に住民が毎年楽しみにする定番イベントになりつつある。今年はオリッシー舞踊の「ソナリ・モハパトラ舞踊団」がインド政府ICCRより派遣され、公演を行なった。その他にステージを盛り上げたのは、カタック舞踊、ボリウッドダンス、バラタナティヤムなどのダンサーたち。他にも、インド人ヨガ講師によるヨガのデモンストレーションや日本舞踊、ストーンミュージックなど。隣のホールでは、インド雑貨の販売、サリーの着付、体験ヨガ教室、抹茶の提供、ワルリー画、菩提僊那像の展示などがあり、屋外では女川の子供たちに人気を博した忍者ゲーム、インスタ映えする記念撮影用のタージマハル廟などがイベント会場を盛り上げた。そして、なんと言ってもナマステ女川の目玉企画の一つであるエア・インディア共催による企画、「インド往復航空券が当たる!?大抽選会」には、今年も多くの人が集まった。

＜会場で行われた女川熊野神社例大祭＞

実行委員、ボランティア、インド大使館、女川町役場、まちなか交流館スタッフ、スポンサーの方、出演者などが互いに協力し合い、協調し合い、インドと女川の交流を実現した。今年もまた素晴らしいイベントとなったことに心から感謝するとともに、その一員としてこのイベントに関われたことをとても嬉しく、また誇りに思う。

今回のナマステ女川の様子は、地元新聞紙「三陸河北新報社」の一面を飾った。

NEWS 石巻かほく：女川とインド、交流深めよう　震災救助を契機に広がる輪｜メディア猫の目

http://ishinomaki.kahoku.co.jp/news/2018/05/20180506t13008.htm

【東日本大震災インド国家災害対応部隊NDRFの活動記録】http://www.ndrf-onagawa311.info/

（本文・写真提供：平本 謙一郎　個人会員）

◇ 事務局からのお願い ◇

個人会員の皆様には、4 月 1 日付で、「個人会員年会費納入のお願い」をお送りしております。皆様には、引き続きのご支援を賜りたく、まだ手続きがお済でない方はお早目の納入をお願い申し上げます。

退会ご希望の場合は、「退会希望」と明記の上、住所、氏名、退会理由をE-mailまたはFAXで協会事務局宛にお届けください。　　お問合せは、本誌19頁、掲示板の最下段をご参照下さい。

同封のチラシ：Bollywood Dance Tokyo Lessons の
【日印協会 会員様限定、割引サービスのご案内】

日印協会会員様 限定で Bollywood Dance Tokyo Lessons の講座を割引価格で受ける事ができます！

各講座、*全受講で、料金から 1,000 円 OFF！メイクレッスンは 500 円 OFF！

この機会に、華やかなボリウッドダンスの世界を
体験してみてはいかがでしょうか？

（＊お申し込みの際に、日印協会の会員であることをお伝え下さい＊）

5. 新刊書紹介
Books Review

§『ガンジーの卓越したリーダーシップ』
著者：パスカル・アラン・ナザレス
監訳：ペマ・ギャルポ、共訳：尾関史生
発行：万葉舎
定価：本体 2,600 円＋税　ISBN978-4-86050-087-0

著者は 1959 年にインド外交官に任官され、世界各国のインド大使館に勤務した。1960 年代には東京勤務の経験もあり、米国シカゴとニューヨーク総領事、駐エジプト大使、駐メキシコ・グアテマラ大使等を歴任し 1994 年に退官。その後は大学や研究所の講師として多くの外国の大学でも講演し、2006 年「ガンジーの卓越したリーダーシップ」が出版され、本書は 12 のインド言語に加え、今までに 19 の外国語に翻訳されており、日本語版は 20 か国語目の外国語版となる。

東京での出版披露会で、著者はマハトマ（偉大な魂）・ガンジーのインドを独立に導いた非暴力抵抗運動は「権力は銃口から生まれるとする同時代の人々の考える『革命に革命を起こした』。ガンジーの偉大なリーダーシップの源は真理を探究する『魂の力』であった」と述べた。また、本書の序文でミカエル・ゴルバチョフ前ソヴィエト書記長は、「ガンジーが卓越した現代のリーダーであり、彼の存命中だけではなく、死後も世界のリーダーたちに大きな影響を与えていることをアランは示しています」と書いているが、著者は今までガンジー精神が真理を実現しようとする世界の人々を力強く後押してきたこと、そしてガンジーの見解と主張の正当性を立証し、今もガンジーの影響力が人々に降り注がれていることを数多くの事例で具体的に紹介している。

それにもかかわらず、なお世界の暴力は過酷さを増しているように見える。暴力の連鎖は止められないのか。2019 年にガンジー生誕 150 周年を迎えるに当たって我々一人一人がガンジーの教えを更に真剣に考えることが求められているのだと思う。

訳者のペマ・ギャルポ氏は「チベット生まれ、インドで育ち、ダライ・ラマ法王の日本・東アジア地区代表を長年務めて、長年日本で働き、日本国籍を持つ」。インドとインドの指導者について身近に知るということからも本書の監訳をするのに同氏は最適任者である。ペマ・ギャルポ氏は当協会の役員としても日印交流促進に一役買っていただいている。

（文責：日印協会参与　宮原豊）

§『インド・シフト～世界トップ企業はなぜバンガロールに拠点を置くのか？』
著者：武鑓行雄（たけやり・ゆきお）
発行：（株）PHP 研究所
定価：本体 1,800 円＋税　ISBN978-4-569-83149-7

著者は元ソニー・インディア・ソフトウエア・センター社長。ソニー入社後はソフトウエアの開発、設計、マネジメントに従事し、途中で「ソフトウエア・アーキテクチャ」をテーマにマサチューセッツ工科大学（MIT）に留学。2008 年 10 月からインド・バンガロールに 7 年間駐在し、2015 年に帰国。ソニー退社後も、インド IT 業界団体のナスコム（NASSCOM）の日本委員会（Japan Council)委員長としてインド側から日印連携を推進する活動を継続している。インド IT 産業の最新情報や日本企業のインドでの活動状況、米国や欧州各国企業に比べて日本企業が何に後れを取っているか、日本企業にとってインド企業との連携がいかに重要であるか、インドの IT 産業が日本の産業全体の発展を押し上げることになる可能性が大きい。これらについて語るのに著者ほど相応しい専門家はいない。

インドIT産業の可能性の高さやITエンジニアの優秀さについて語られるようになって久しい。元はオフショア開発（システム開発や運用管理の一部工程を請け負うこと）であったが、バンガロールはいつの間にか最先端のテクノロジーを用いた研究開発型の上流工程を担う戦略的拠点に脱皮している。インドは最先端の IT を理解するモチベーションの高い若手の「高度IT人材」を桁違いで輩出している。インド工科大学（IIT）をはじめ理工系学部の卒業生は毎年100万人、その中から20万人がIT業界に採用されるという。

インド側にとっては、日本企業のインドIT企業活用、あるいは日本のIT企業のインド進出や連携は常にウェルカムであるにも拘わらず、インドIT産業の日本向けウェイト（%）はいつまで経っても変わらない。ITイノベーションは IT の世界に止まらず、スマート・フォンは生活やビジネスを変え、情報家電だけでなく身の回りの全ての製品やサービスがネットに接続される IoT、ビッグデータを元に人々の行動を分析するデータサイエンス、ブロックチェーンを筆頭とするフィンテック、AI(人工知能)等々の分野で急速に変化している。そしてインド・バンガロールには世界の最先端を走るトップ企業が拠点を設け、それらと提携するインド企業も最先端の情報の近くで飛躍的に成長しており、その拡大のスピードと規模は想像を絶するものがある。

世界の IT イノベーションは予想もしないスピードで世界中を変えている中で、バンガロールに行けば世界の IT 産業の最先端が見える。そして、インドは世界のスタートアップ大国になることが確実である。「日本側が自ら変わる意識と覚悟が必要だ。日本企業はまだシリコンバレーを目指しているが、シリコンバレーはバンガロールを目指している」と言う。まだ遅くはない。インドに行こう。「インドとどう向き合うかで、日本企業の未来は決まる」。この本はどの章のどのページを開いても刺激的である。　　**（文責：日印協会参与　宮原豊）**

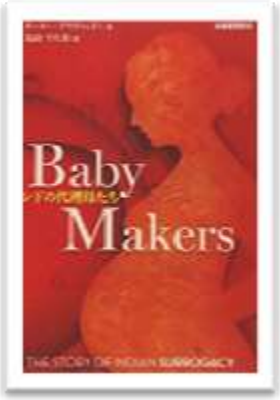
§『インド文化事典』
編：インド文化事典編集委員会
発行：丸善出版
定価：本体20,000円+税　ISBN978-4-621-30235-4

「この事典は、激動するインド世界をめぐるさまざまな事象、問題を、文化を切り口として簡明かつ具体的に解説したものである。」196名のインド専門家が、それぞれに特化した内容を執筆。

［インドとは/カーストとコミュニティ/家族・ジェンダー/文芸・言語・教育/宗教とナショナリズム/哲学・思想、歴史・表象/社会運動/ファッションと手工芸/食文化/暮らし/身体・医療・スポーツ/音楽・芸能/映画/アート・芸術/経済・産業・金融/消費と流通/グローバル化］

以上、インドを語る上では欠かせない18の項目に、300を超えるサブ項目、33項目の付録（地域・都市）が付いた、インドを知るための知の集大成。

§『インドの代理母たち』
著者：ギーター・アラヴァムダン　　訳者：鳥居 千代香
発行：柘植書房新社
定価：本体2,300円+税　ISBN978-4-8-68-0708-7



インドでもベストセラーとなった（邦題）『インド 姿を消す娘たちを探して』の著者、先駆的な女性ジャーナリストであったギーター・アラヴァムダンのノンフィクション作品。複雑極まりない社会問題に鋭く切り込み、丁寧で正確なフィールドワークで掘り下げた秀作。

6. 掲示板
Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回発送は、2018年6月15日(金)を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

<編集後記>

<サーランギー奏者の Surjeet Singh>

サーランギー（Sarangi/सारंगी）という楽器をご存知だろうか。百（sau/सौ）の（音）色（rang/रंग）をその名に持つ、インド起源の擦弦楽器である。1本の木材から削り出され、長さはおよそ60センチ。胡坐になり、縦に抱える形で演奏される。大きな楽器を抱え、ダイナミックに優雅に演奏するシタールとは違い、猫背で屈みがちに演奏するサーランギー演奏家には、どこか哀愁が漂う。サーランギーは、インドの楽器の中で最も人間の声に近い音を持つとされ、情熱的に指が弦をすべる時、得体の知れない動物が、慟哭する叫びのような重層的で深い音になる。北インド地域で発達したインド古典音楽（ヒンドゥスターニー音楽）において、17世紀から、主に声楽の伴奏楽器として用いられてきた。ヴァイオリンの様に弓を使い、横から爪で押すようにして音程をとるので、奏者の爪は変形していることが多い。3本の演奏弦と、数十本の共鳴弦を持ち、長く美しい残響効果が特徴的であるが、マスターするのが大変難しい楽器としても知られている。

とりわけこの楽器は、生で聞くことがその魅力を知る秘訣である。全身に響く、立体的で重層的な音は、この楽器が空気を直接震わせる、その現場でしか味わうことができない。残念ながら、シタールと違いサーランギーの演奏を日本で聴くことは滅多にできない。しかし、この編集後記を辛抱強く読み、興味を持って頂いた心優しい皆様、朗報です。この楽器を演奏する、ムンバイ在住の日本人演奏家が存在するのです！インド人グル（師匠）に師事し、インド人と見紛う容貌を持つ彼は、度々来日しては、日本でその音色を聴かせてくれる、編集子の天使である。その名もナカガワ ユウジ。インドの古典音楽は、遥か昔からヒンドゥー寺院やヒンドゥー藩士、ムスリムの為政者など多様なパトロンにより支えられ、様々な文化を吸収しながら発展してきた。ということで、あなたも、インド古典音楽の日本のパトロンになってみてはいかがでしょうか？（といっても、ライブに行くだけですが…ナカガワ ユウジさんのFacebookやブログを要チェックです！）

(玉岡 善美)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解･ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

入会随時受付中

日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の３名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人･個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費:	個人	１口(8,000円)から	☆入会金	個人 2,000円
	学生	１口(4,000円)から		学生 1,000円
	一般法人会員	１口(100,000円)から		法人 5,000円
	特別法人会員	１口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド Vol.115 No.4 (2018年5月18日発行) 発行者 平林 博 編集者 西本 達生
発行所 公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: https://www.japan-india.com/